

12月号と2020年の1月号は、遼陽出身の人物そして遼陽に深く関わった人物を紹介します。まず最初は女真族の「ヌルハチ」です。彼は遼陽出身ではありませんが、遼陽を語るときこの人無しでは語れないというくらいの人物です。前号の最後に書きましたようにヌルハチは漢字で書けば、(愛新覚羅努爾哈赤)です。つまり愛新覚羅家のヌルハチさんです。参考までに清朝のラストエンペラーの溥儀は、(愛新覚羅溥儀)です。ヌルハチは後金(後の清朝)の創始者で、瀋陽市内にある立派な「福陵」というお墓に眠っています。一番立派で広大な陵墓は2代目のホンタイジ(皇太極)の昭陵です。瀋陽市の北部に位置していることから「北陵」とも呼ばれますが、この呼び方が通りがよく今では「北陵公園」として整備され、瀋陽市の有名な観光地となっています。中国共産党はこの二人を「後金」の皇帝とし、三代目の「順治帝」から清朝の皇帝としています。1644年に明の最後の皇帝の「崇禎帝」が紫禁城のすぐ裏手にある景山の麓で縊死した後、順治帝が瀋陽から北京に遷都しました。それ以降が清朝ということですね。

後金というのは、前号でも書きましたが、女真族が1115年に「金」という国を建て1234年に元に滅ぼされますが、その約500年後にまた女真族が金という国を建てたので、区別するた

めに「後金」としたことを書きました。清は1911年に倒れるまで267年の長期政権でした。金と清を合わせると少数民族の女真族は386年も天下を取ったこととなります。2010年の中国の国勢調査では満州族は1038万人とされていますが、1千万人程度の民族が何億という漢民族を統治したのですから立派なものです。全国統一し



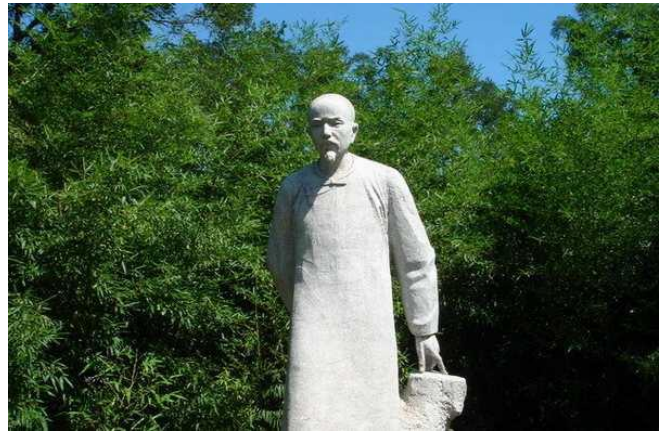
ヌルハチ (ウィキペディアから)

た秦(BC221年~BC206年)以降では、前漢と後漢合わせて409年となる漢朝に次ぐ長さと言えましょう。なお「女真族」は、17世紀に「満州族・または満族」と改称されました。これは満州語の民族名manju(マンジュ)の当て字なのです。

さてヌルハチの生誕地は、「ヘトゥアラ(満州語)」で現在の遼寧省・撫順市です。撫順市は石炭の露天掘りで有名だったところで、省都の瀋陽から東に45kmの所にあります。因みに人口は207万人(2015年)で車のナンバーは鞍山市に次ぐDです。ヌルハチが生まれた1559年頃は、女真族は大きく4グループに分かれ互いに抗争を続けていましたが、次第に頭角を現わした彼は苦難の末彼らをまとめあげ1616年に後金を興し生誕地のヘトゥアラを都としました。57歳の時です。そして1622年に遼陽に遷都するのです。遼陽は、金の時代は副都の位置づけでしたが史上初めて都になった瞬間です。ではなぜヘトゥアラから遼陽に遷都したの

でしょうか？ 大きく二つの理由がありそうです。その一つは、ネットでは「明、朝鮮、モンゴルに近く、太子河を利用して建築資材を調達しやすく食料自給がしやすい」旨が書かれています。撫順市と遼陽市はさほど遠くなく三つの国に行くのに地理的条件はあまり変わらないと思います。私はもう一つ、八つの城門を備えた堅固な城があったことが挙げられると思います。1621年にヌルハチが明が守っていた「遼陽城」を攻め落としたのですが難攻不落であったことからこの地に移ったように思います。この城に一度は入ったヌルハチですが、翌年には遼陽市の郊外に「東京城」を造りそこに住むのです。なぜかはよくわかりません。さらにその3年後には遼陽にとっては残念なことに瀋陽に再び都を移すのです。その地に東京城の建築資材を使い、立派な宮城を構築するのです。それが2004年に「瀋陽故宮」として世界遺産に登録され、これまた観光名所になっているのです。私にはヌルハチは計画性に少し欠ける様に思いますが、如何でしょうか？ 東京城にはやはり2008年に行ってみましたが、一部が復元されているだけで昔の面影はありませんでした。

中国の東北地方を中心に書いて来ましたが、ヌルハチが頭角を現した16世紀の後半は朝鮮半島や日本との関係はどのようなものであったのでしょうか。朝鮮半島は朝鮮王朝が支配し第14代王の「宣祖」の時代で、日本は安土桃山時代で豊臣秀吉の天下でした。その秀吉が朝鮮半島はもとより明も征服しようとの夢に陥り、朝鮮に出兵したのはご存知の通りです。1592年の文禄の役、そして1597年の慶長の役で朝鮮半島は大混乱となりました。宣祖は息子の「光海君」に国を預け北の方に逃げ出す有様でした。この時実は、



曹雪芹石像（百度百科から）

ヌルハチは朝鮮王朝に日本軍を攻めよう、と次のように申し出たようです。〈倭奴は既に朝鮮を侵奪している。やがて中国東北部まで侵そうとするであろう。よって精兵を選び厳冬に氷の合するを待って倭奴を征伐したい〉しかし、流石の朝鮮王朝も女真が来ればそれこそ国そのものが亡ぼされると判断したのでしょうか。その援兵を拒絶したそうです。

ヌルハチの最後を見てみましょう。1625年に瀋陽に遷都した翌年、いずれ明に攻め入るため、まず山海関を陥落させようと考えたのです。陥落するにはその手前にある寧遠城（今の遼寧省・葫蘆島市の中の県級市である興城市）を攻め立てましたがその時に負傷し、それがもとで亡くなります。享年67歳でした。戦いに明け暮れた生涯でした。後金が山海関を越えるのはそれから約20年後のことでした。

ヌルハチに紙面を取り過ぎた感がありますが、今号ではもう一人「曹雪芹」について紹介したいと思います。多くの方は「紅樓夢」という小説をご存知だと思います。「三国志演義」「西遊記」「水滸伝」と共に中国四大名著と言われます。日本でも映画に芝居にと親しまれていると思います。紅樓夢の作者が、曹雪芹ということも知られていますね。ところが曹雪芹には他の

歴史上の人物と違ってさほど詳しい資料がないみたいなのです。まず生没年からして曖昧です。生まれたのは南京ですが、生まれた年は1715年とも1724年とも言われているのです。没年も1763年と1764年の二説あるのです。たかだか300年前の人なのに、です。彼は、ヌルハチが創設した有名な「八旗軍」に属する漢族ながら旗人の家柄で、北宋の建国に功績があった名将・曹彬(931年～999年)の子孫と称したそうです。一族の間では魏の「曹操」(155年～220年)の末裔と伝承されているそうです。彼がなぜ南京の生まれかと言いますと、曹家は曾祖父以降3代にわたり南京にあった「江寧織造」という宮廷用織物を製造する会社を経営していました。清の第4代皇帝の康熙帝の信任が厚く、一家は南京で充実した生活を送っていたのです。実は曹雪芹の曾祖母が康熙帝の乳母ということもありました。ところが父の代で、第5代の雍正帝の帝位継承問題にからんで彼の一家は雍正でない側に付いたので家産を没収され曹家は没落。貧窮の中で一家は北京に移りました。その後雍正の13年間が終わり、乾隆帝になって曹家の生活は落ち着きを取り戻したのです。彼は友人の勧めもあり、紅樓夢の執筆に没頭し始めました。しかし運命は非情で1762年に愛する我が子を奪ってしまったのです。彼は悲嘆にくれるあまり自分も病の床に就き、とうとう1763年にこの世を去ったのです。(前述のように1764年という説もあります) 貧しい生活の中で20年間心血を注いで書いた紅樓夢はついに未完の小説となってしまいました。全120回のうち80回までが曹雪芹の作で、残りの40回は「高鶚(こうがく)」の作と言われています。

ではなぜ遼陽に関係の深い人かと言います

と、彼の祖籍(ルーツ)が遼陽市であるからです。おそらく遼陽に住んだことは無いと思いますが、遼陽市民は彼のことを誇りに思っているのです。そのためか市内に「曹雪芹紀念館」があり彼の功績を顕彰しています。私は友人と2008年に紀念館に行ってみました。中に入ると広い庭の中程に曹雪芹の座像が置かれていました。その奥に平屋建ての紀念館があり見学しましたが、一見の価値があると思いました。手元に「遼陽」と題する中国地図出版社が発行した分厚い書物がありますが、それには彼についてかなりの紙面を割いて紹介しています。紅樓夢と言え、「紅学」ですね。紅学は、紅樓夢に関するあらゆる学問をさします。前述したとおり、彼の人生ははっきりしていないことが多く、また未完の小説ということ、描かれた世界は人々の関心を引くことなどから学問の一ジャンルとして確立したと思います。紅学の研究の柱は主として次の4点と言われています。

①曹学：曹雪芹の生涯、家系に関する歴史的
研究

②版本学：原稿に近い手写本に関する研究

③脂批学：紅樓夢の完成を支援した脂硯齋と
いう人物の研究

④深佚学：80回までの本文、及び「脂硯齋の
批注等から81回以降を探求する研究(脂硯
齋という人物については諸説あり)

という具合です。中国語の辞書にも「紅学」は載っています。なお紅樓夢の初版本は彼が死んで27(28)年後の1791年に発行されています。主人公である賈宝玉、美少女の林黛玉、良妻賢母型の薛宝釵を中心に展開する上流階級の生活を描いた紅樓夢は、あの毛沢東も愛読したそうです。(続く)